

李箱「終生記」の「前書き」の分析 —作品の構造と「前書き」の話者としての主人公

The analysis of “Preface” — The structure of “The record of lifetime” of Yi Sang and the protagonist as a narrator of “Preface”

辛大基
SHIN Daiki

要旨 李箱の「終生記」は非常に読みづらい作品である。この作品には「前書き」が「本編」の前に添えられており、主人公がどのような構想で作品を展開させていったのかを示す文章であると考えられる。「前書き」を分析することによって「本編」をより理解できるようになる。「前書き」は1ページ余りの文章であるにもかかわらず、作品において非常に重要な役割を果たしているのである。本論文ではこの「前書き」の文章を6段落に分けて分析していく。そのことによって「本編」の構造はもちろん、それを展開させた話者の構想や作品執筆に関する自信と評価に関する不安といった内面までが明らかになってくるはずである。

序

李箱の代表作「終生記」は非常に読みづらい作品として知られている。それは単語や文章自体が韓国語として成り立っていないところが多いためであり、解説することからすでに壁にぶつかってしまうからである。しかし、「終生記」の読みづらさはこれだけにとどまらない。その理由は作品を構成している文章が、事件の進行を表す叙述よりは、一人称の主人公による内面独白の文章が圧倒的に多いという、「終生記」の文章的な特徴にあるのである。一つ概念に対して次々と内面の心境が湧き出て披露されるため、速い展開の主人公の内面を追いながら読むには相当の苦勞を要する。これとともに「終生記」を読みづらくする更なる原因は、構造的な問題とその構造に伴う話者の問題も関わっている。

幸い「終生記」は「本編」が始まる前に「前書き」の形式で1ページあまりの文章が添えられており、「本編」の内容や手法を圧縮して提示する役割を果たしていると考えられる。したがって「前書き」を分析することは「本編」を理解するのに当たって非常に有益である。本論文では、「本編」分析の予備段階として、「前書き」の分析を試みることによって、「終生記」を読みづらくする原因となっている構造や話者の関係や作品の全体的な手法や方向性を明らかにして、「本編」の理解を図りたい。

1. 「終生記」の構造

「終生記」は形式的に「前書き」と「本編」に分けられる。この区分は二つの文章の間が数行空けられているのに加えて「×」の印で区切られているため、誰が見ても一目で分かる。その部分を抜粋してみると次の通りである。

（前略）こじんまりした儀式のために — ばら撒いてみようとしているのだが、一幸に拍手する。以上

×

×

×

「侈奢な少女は」、「解凍期の小川に立って」、「唇が落花のように蒼くなりながら」（後略）¹⁾

しかしながら「終生記」はこのような形式的に二分された構造に止まるものではない。作品のメインになる「本編」の内容を分析していくとさらに「秋の物語」と「春の物語」に分けられる。しかし、この区分に関しては目に見えるようなものではなく、文章の内容で判断するしかない。それも抜粋してみると次のようになる。

眉間を擧めてももっとも高邁な顔は持続すべきことを忘れてしまわず、そして続けてひどく懊悩していたら（私は一分一秒を無駄にはしない。私はない知恵を絶えることなく搾り出す）速達がきた。少女からだ。

先生！夕べの夢でも私は先生にお会いしました。夢の中で先生はとても多情でございます。私を子供のように可愛がってくださいませ²⁾。

秋と春を分ける境目は明確なものではなく、むしろどこで分ければいいのか曖昧になっているが、それは「少女」からの速達が来たことを回想することを境に分けることができるのである。秋の時点に置かれている主人公が過去である春を回想しながら、「先生！」から始まる速達の文章がそのまま挿入されることによって春の時点に移るのである。すなわち、上記の速達の中で、時間的な設定が分かる記述が存在し、それを参考にすると、春の「3月3日」の回想が明確に始まるのは速達が来たと言語文章からであり、「本編」が進行していく過程で、秋の主人公と見られる話者が直接、頻繁に登場し、ストーリーの訂正を加えているため、春の物語は秋の主人公による創作作品の中の世界であると考えられるのである。

したがって、小説の中の小説の構造をとっており、しかも小説の中の小説という構造は「前書き」と「本編」の分類のように一目で分かるものではなく、それをさらに難解な文章や表現に紛らせているのが「終生記」の構造的な特徴である。

2. 「前書き」と「本編」における話者の時間 — 構成上の時間と実際の時間

「終生記」の構造は先述の通りであるが、しかし、その際、もう一つ問題が生じてくる。

¹⁾ 金允植篇『李箱文学全集2 小説』文学思想社 1998年11月、376～378頁。原文はハングルで、筆者の翻訳である。翻訳はなるべく原文を忠実に反映しようとしたものである。その際、いくつかの翻訳上の問題点も現れたが、日本語で意味が通じるように直した。以下の引用はこの翻訳に従う。ただしページ番号は全集に従う。以下「終生記」の引用はページ番号だけを示す。

²⁾ 380頁

それは「前書き」と「本編」の置かれた位置や、そのことによる時間に関する問題である。「前書き」は「本編」の前に位置しながら実際は後記のような書き方をしていると考えられるが、それには「終生記」を展開させていく話者が置かれている時間が関係してくる。まず、この関係から明らかにしていきたい。

「終生記」は「前書き」と「秋」、「春」の三つの構成でできていることは先に述べたが、「前書き」の話者は秋の主人公の延長線上にある同一人物である。では、この二人が同一人物だとすれば、ここでもう一つの問題が浮上する。それは両者の時間帯が一致しないことである。秋の主人公が「終生記」の序章になる文章の一部を書いて、貞姫からの手紙を思い出すことによって春の物語に移り、それが自然に作品「終生記」に変わり、序章までもその作品の中に吸収されて作品の内容の一部を構成するようになる。そのため、時間的な順序を考えれば「前書き」は秋の物語より後になって書かれたものになる。つまり、「前書き」は作品を全て書き終えてから、その作品に対する評価やどんな気持ちで書いてきたのかなどを綴った文章である。「本編」の物語を統括してまとめるためには「本編」より上部の視点で語らなければならない、ある程度客観的に自分の作品を振り返らなければならない。秋の主人公が思い出した春の記憶の結末は悲劇的なものであり、その日以来毎日死んでいくことを秋の主人公は語っているが、その主人公が作品と距離をおいて最も客観的に過去や自分を振り返って書いたのが「前書き」になる。そして「前書き」の視点が「終生記」における現時点になるのである。

したがって、「前書き」は時間的には最も後に置かれる時間であるといえる。しかしそれにもかかわらず、作品の最も冒頭に位置していることにはさらなる理由がある。時間的な順序は「春」→「秋」→「前書き」であるが、作品内の配置は「前書き」→「秋」→「春」のように逆順になっている。その目的は「終生記」を永遠に終わらない作品にすることである。「春」の結末が作品としては最後になるはずであるが、貞姫が浮気を続けている限り、「終生記」は終わらないと主人公は語っているが、その後、作品を振り返るかのように「前書き」でつぶやく文章がつながることになる。貞姫が去り、自分は終生を果たすことになり、現時点に戻ると同時に、続きの叙述の位置が作品の冒頭になっているため、続きを読むには作品の最初の頁に戻るしかないという循環が繰り返されるのである。

作品が終わらないことは、しかも永遠に続く可能性があることは、作品が未完成であることを意味する。読者が読む「終生記」自体はそのまま完成した作品として読まれるかもしれないが、主人公が書いている、主人公にとっての「終生記」はいつまでも終わらない未完成の状態が存在するのである。

ただし、一つ付け加えると、作品構成の時間的な問題は上記の通りであるが、主人公が作品を書いている順番は「秋」→「春」→「前書き」の順になる。なぜこうなるかというと、秋の主人公は自分の身辺に関する問題を書き綴りながら作品を展開させているが、その後、春のことを回想しながら更なる作品の世界を広げているからである。これはすでに書き上げておいた作品を挿入しているのではなく、実際に創作していく過程に位置しているものだからである。その証拠として、作品の展開の途中、一度語った叙述に対して訂正していく箇所がいくつか存在することを挙げることができる。例えば、「日は暮れた。いや！まだ暮れていないことにした方がいいだろう。日はまだ暮れていなかった³⁾」と訂正して作品を展開させることや「では先ほど準備しておいた所帯道具を使ってゆっくりと所帯を

張ってみる天佑の好機が私の前に近づいてきたようだ⁴⁾、「前記の侈奢な少女云々はあくまでもこの馬鹿の李箱の好意からきた曲解だ⁵⁾」と、序章のつもりで書いておいた作品の一部を挿入しながら内容は全く違うものに仕立てようとして訂正を仕掛けていることを考えると、リアルタイムで作品を書いている真最中であることが分かる。このようなことは話者の置かれている状況と深く関係してくる。

3. 「前書き」と「本編」の関連性

「前書き」は「本編」の縮小版のような役割をしているため、「本編」を理解するのに非常に有益でありながらも、謎めいた表現に満ちているため、容易くは理解できない。この節では「前書き」詳しく分析したいと思う。では、その全文を引用してみよう。

卻遺珊瑚 — この五文字の内、私は二文字以上の誤字を犯したかと思う。これは私自ら天を仰いで恥じるべきことだろうが、人智が発達していく面目が実に躍如たるものだ。

死ぬことがあってもこの珊瑚ムチをしっかりと握って死ぬ。君の廃袍破笠の上、色褪せた亡骸の上に鳳凰が降りて座るだろう。

私は私の「終生記」が天下の見る目のある学者たちの肝胆をヒヤッとさせることをしみじみと願う一念の下、これほど吝嗇な私のお洒落の節約法を披瀝して見せる。

一発の砲声で止むを得ず英雄になってしまった稀代の軍人某は90歳の恐れ入った一生を終える日、これといった遺言一つもしゃべらず、臨終の場面を巧みにも（無事にヒューと溜息がでるほど）越した。

ところで私たちのレフオチカ — 愛称トルストイ — は風呂敷包みを背負って出掛けるところまではせいぜいそれらしく飾ることができたが、最後の5分に至ってうっかりとしくじった。余計な遺言の端くれのせいで70年もの念入りに築き上げた塔を崩して、見掛けのいい一生に消えない傷の一つ作ってしまった。

私は一個の狡猾なオブザーバーの資格でそんな愚昧な聖人たちの生涯を傍聴しているため、私がそんな類のミスを知っていながらも再犯するはずがないのだ。

鏡に向かって髭を剃る。誤って傷をつける。私はかっ腹を立てる。

しかしやっさもっさ大騒ぎする複数の「私」と私は正面から衝突するため、彼らはそれぞれベストを尽くして自分だけを弁護するため、私はなかなか犯人を見つけ出すことが難しいという話だ。

だから大抵愚かな民衆は「猿が人間の真似をしているなー」と安心して過しているようだが、実は人間が猿の真似をしながら過しているところで、至当な典故を理解できないせいだろう。

嗚呼、一挙手一投足が既にアダムとイブのそのような衝動的な習慣からは脱却して長くなる。反射運動と反射運動の狭間に挟まれて暫時実に電光石火のように指が自意

³⁾ 387 頁

⁴⁾ 同上

⁵⁾ 387～388 頁

識の虜になった時、私は久しぶりに私の虚しい歲月の中で閑却している奇岩たる私の鼻を少し触ったり、あるいは高貴な対話と対話が並んだ鎖の間でも正に刹那の瞬間を許容する窓があるため、その恐ろしく鋭い刃先が自意識をコントロールする暇もなく両方から切断する瞬間、私は私の明鏡のように澄むべき至宝たる両目にまさか目糞がついていないかと疑うかのように、適切に皺のついたハンカチを取り出してはその両目を触ったり、――

私の魂魄と肉体に染みこんでいる、落ち着いた怠慢性がそんな些細な煙火などなどをいちいち追いながら（見て来て）私の統括される所々に告げなければならない、そんな圧倒的な忙殺を私は到底処理することができない。

しかし私は私の至重なる珊瑚鞭を自慢したい。

「くず」「生ごみ」

この薄汚い単語の雰囲気は貴方は満足に理解なさっていますか。

貴方は貴方が基督教式で結婚した日、ネーブ・アンド・アイルでこの「くず」「生ごみ」に近似した感興を味わったと思われるのだが、果たしてそうではありませんか。

私はそんな「くず」か「生ごみ」のようなテープを――私の終生記の処々に可憐に仕掛けて置いた、こじんまりした儀式のために――ばら撒いてみようとしているのだが、――

幸に拍手する。以上⁶⁾

この「前書き」は、文章の量としては1ページぐらいで短い、六つの段落に分けることができる。その六つの段落とは、

- ① 卻遺珊瑚 ～ 節約法を披瀝して見せる
- ② 一発の砲声で ～ 再犯するはずがないのだ
- ③ 鏡に向かって髭を剃る ～ 至当な典故を理解できないせいだろう
- ④ 嗚呼 ～ その両目を触ったり
- ⑤ 私の魂魄と ～ ばら撒いてみようとしているのだが
- ⑥ 幸に拍手する。以上

である。ではこれから各段落を分析しながら、「前書き」の役割について考察していこう。

3-1 話者の問題

「前書き」の最初の段落が「卻遺珊瑚～節約法を披瀝して見せる」で、謎めいた四字熟語の提示や「終生記」を披瀝して天下の学者を驚かすことを望んでいる内容でできているが、この段落からは様々な事情を読み取ることができる。しかし、話者の問題に関して考える際、最も重要な事実となるのが、「前書き」で語っている話者が「終生記」を書いた事実である。「終生記」の構造を考える際、小説の中の小説という構造が非常に重要であり、第1段落の文章は、「終生記」がこのような構造でできていることを最初から教えてくれるものであるが、その際、「終生記」におけるもうひとつの重要な事実が隠れていることを見つけなければならない。それは作品の構造もさることながら語り主体である話者に

⁶⁾ 375～378頁

関する問題も考えさせる文章である。

まず、この「前書き」を語っている話者は誰なのかである。一人称で語っている虚構の話者で、置かれている時期は違うが、「本編」の話者が一人称であるのと同様である。さらに決定的に段落の終わりあたりに「私の「終生記」が（中略）披瀝して見せる」と語っているため、主人公が「終生記」を書いたことが考えられる。「終生記」を書くのは「本編」の中の秋の主人公も同様である。したがってとりあえず、この二人の人物は同一人物であることが考えられる。では、秋の主人公についてより具体的に述べてみよう。

秋の主人公は自ら語っているように「私は只今秋風がうすら物淋しい私のじめじめした部屋で一人寝て終生を迎えている⁷⁾」と、とある秋の時点におかれている虚構の一人称の設定である。この人物は非常に厭世観を持って毎日生を終えることだけを考えており、さらに納得のいく遺書を残そうと、非常に悩んでいる人である。ところで、この主人公の日常は、表面上は遺書を書くことと生を終えることだけで一日が終わるが、もう一つ、ある作品を書いていることである。主人公は「私は私の終生期の序章を飾るかの名高い珊瑚鞭をより確実にするために、上でのような実に私としてはあまりにも過分に侈奢で物々しい世帯道具を準備したのだ⁸⁾」と、数行の文章を提示してはこのように語っているのであるが、明らかに「終生期の序章」を書いていると語っている。

その文章は後ほど「序章」として使われるより、作品の一部として溶け込んでいくが、現時点では「序章」を書いていることになる。そして貞姫という、主人公の心を掴んでいる少女から手紙がきた春のことを回想しながら、物語の時間設定は春の時点に移るが、この春の出来事は単純に主人公の回想を描いたものではなく、その回想をベースに新たに書かれる作品になっているのである。

このように考えると、秋と春の主人公は一見同一人物のようにも見えるが、全く別の人物である。したがって「前書き」の話者がどちらかという、作品を書いている秋の話者に近い。これに「私は私の「終生記」が天下の見る目のある学者たちの肝胆をヒヤッとさせることをしみじみと願う一念の下、これほど吝嗇な私のお洒落の節約法を披瀝して見せる」と、自分が書いた作品を「終生記」であると語っていることや、それを世間のみんなを驚かすために書いた趣旨までも語っていることを、秋の主人公が「終生記」の序章を書きながら「本編」が始まることを重ねて考えてみると、「前書き」の話者が秋の主人公と同一人物である可能性は非常に高い。

3-2 大事なもの一遺書と貞姫

では上記の話者とされる人物が書いたとする作品「終生記」とはどんなものかについて述べてみよう。主人公が作品を書いていることを考える際、思い浮かぶことは、まず遺書を書いていることで、次に貞姫との回想を作品として書いていることであるが、果たして主人公はどちらを表現したかったのだろうか。この問いは第1段落の「珊瑚鞭」の意味と深く関係している。なぜなら、「卻遺珊瑚」と書いてミスをしたという、謎めいた表現の中には、失いたくない、主人公にとって最も重要なものの意味が含まれているからであ

⁷⁾ 378 頁

⁸⁾ 同上

る。

「欲遺珊瑚鞭」と提示して二文字以上のミスをしたと語っているが、提示された4文字をそのまま解釈すれば「珊瑚を捨てる」の意味になる。しかしその意味を表した熟語が誤字で、ミスをしたとしているので、「珊瑚を捨てる」ことは本来表したかった文章の意味ではない。では本来表したかった文章とは何だろうか。それは、「二文字以上の誤字」と「珊瑚ムチをしっかりと握って死ぬ」と書いていることから、「珊瑚を捨てる」の正反対の「欲遺珊瑚鞭」（「珊瑚鞭を残したい」の意）が本来の表したい文章であったことになる。

そして、死ぬことがあっても手放せないほどのものが「珊瑚」あるいは「珊瑚鞭」であるため、主人公にとっては最も貴重なものであり、命よりも大事なものの可能性もある。それを作品化し、かつ披瀝して世間を驚かすことを語っているため、主人公が書いたとする作品は最も大事な存在である「珊瑚鞭」になる。では、主人公にとって最も貴重で大事なものとは何だろうか。第一に考えられるのが貞姫の存在である。「終生記」の「本編」は貞姫に対する愛情を描くことが大部分を占めているだけに、貞姫に捧げたい愛は大きいものである。さらに、主人公は貞姫が原因で卒倒し、死ぬほどのショックを受け、しまいには自分が死んでも諦めないほどの存在になっている。そのため、「本編」で描かれている内容を読む限り、主人公にとって最も大事なものは貞姫である。貞姫を死ぬことがあっても離したくない貴重な存在と考えていることは、春の物語が始まって、貞姫からの手紙の内容を嘘であると決め付けながらもわくわくして会いに行くことや、彼女に会ってからは何としてでも彼女の心を掴むために異常と思われるほどの言動をし続けたりすることから十分分かることである。このように、主人公にとって、貞姫は死ぬことがあっても離したくない貴重な存在であるが、愛してやまない貞姫の心を捉えることができず、「S」に奪われてしまう。主人公が本来望んでいたことは、貞姫と幸せなゴールを迎えることであり、そのことを描いた作品である。貞姫を珊瑚に喩えたと考えれば、珊瑚を捨てると書いたことはミスであり、珊瑚鞭を残したいのが本音であることは正に貞姫との関係を喩えていると言えるのである。つまり「欲遺珊瑚鞭」になるのである。

そしてもうひとつ、秋の主人公が貞姫とともに大事にしていると考えられるのは遺書である。「十二時間以内に終生を迎えて、そして仕方なくああ工夫したりこう工夫したりしながら、遺言らしいものがどこか遺失されていないかと探して、探してはその中から役に立ちそうなものをいくつか選ぶ。しかし孤独な晩年の中で一句のエピグラムも得られず、そのまま凄惨に私は物故してしまう⁹⁾」と、遺書を書くことに全神経を失らせていることが分かるが、12時間以内に生を終えようとしている主人公、つまり死を目前にしている主人公にとってもはや遺書は人生の全てであるといっても過言ではない。さらに、「13個の遺書がほとんど完成していくのだった。しかしどれを選び出して読んでも、みんなが36歳で自殺したある「天才」が去りながら枕元においた蓋世の逸品の重流から一步も出ることができなかった¹⁰⁾」と、大事にしている遺書を文章化していることも分かる。

以上から考えると、主人公にとって最も大事なものは貞姫と遺書の両方になるのである。

⁹⁾ 379頁

¹⁰⁾ 380頁

ところで注目したいのは、これら二つの大事なものがそれぞれ別個に存在しているのではなく、次第に同格化していくことである。秋の主人公は春の出来事である貞姫とのデートを回想しながら作品を書いている。この春の出来事を主人公は頻繁に「終生記」に喩えている。それを引用してみると次のようになる。

- ① 私は普通じゃない豪傑らしく唇に歯磨き粉を白くつけてはその絢爛たる鏡の前に座って、もう豪華壮麗に開幕しようとする私の終生を悠々と楽しむことにしてそれに当てはまるように私の格好を收拾しようとするのだった¹¹⁾。
- ② 飲み込まれる私のみすぼらしい終生、これほどミスが多くては物貨的な全生涯を蕩尽していきながら死守してきた珊瑚篇の本意がいったいどこにあるのか。ずっとムカッとしてきて昏倒しそうだ¹²⁾。
- ③ 思いもよらぬこのそそっかしい「終生」、私は夭折のようだ¹³⁾。
- ④ 目を覚ました時にはそこに貞姫はいない。勿論8時を過ぎた後だった。貞姫はあそこへ行った。こうして私の終生は終わったが、私の終生記は終わらない。なぜ？¹⁴⁾

引用から分かることは、貞姫に会うことを自分の「終生」を飾るためであると主人公が考えていることや、そのことに関して書いた作品を「終生記」であると受け止めていることである。特に引用②からは「死守してきた」作品を「珊瑚篇」と語っているため、「終生記」＝「珊瑚篇」であることも分かる。先ほど述べた珊瑚鞭¹⁵⁾が、主人公にとって最も大事な存在を指していることと同一概念である。つまり、秋の主人公は貞姫と遺書を、人生において同様に大事にしており、貞姫との出来事を回想しながら書いた作品を遺書の代わりにしており、それを「終生記」と呼んでいるのである。したがって春の出来事の回想＝終生記＝遺書の等式が成立するが、この三つとも主人公には死んでも離さない珊瑚鞭に当たるのである。

3-3 主人公の本音—主題の表れ

死ぬことがあっても離したくない珊瑚鞭は第5段落の文章を分析してみるとより明らかになる。それは「私は私の至重な珊瑚鞭を自慢したい」と、作品を自慢したいことを語ることから明らかに分かる。自分の忙殺を処理することができないと、自分の怠慢によって思っていたことや書きたいことを全て表すことはできないが、それにしても自分なりに書き上げた作品を自慢したいと語っている。その自分なりに書き上げた作品が「くず」と「生ごみ」で象徴される概念に関する内容になる。

では、「くず」と「生ごみ」という二つの単語は何を意味するのだろうか。二つの単語は「薄汚い」意味を持つものと語っている通り、明るいところで輝くものとは正反対の陰

¹¹⁾ 383 頁

¹²⁾ 389 頁

¹³⁾ 393 頁

¹⁴⁾ 396 頁

¹⁵⁾ 珊瑚鞭も珊瑚篇も韓国語の発音では「サノピョン」と読めるため、文字は違っても同一概念であると考えられる。

湿で汚いイメージを持った単語である。それを、結婚式をあげる日に味わう感興と類似していると語っている。そのため、二つの単語は恋愛をしている男女の気持ち、さらに恋愛からゴールまでの男女の気持ちを代弁していることがまず考えられる。主人公はこのような恋愛に関する物語、特に自分が愛してやまない女性に関しての物語を書こうとしているのである。手に負えなくても珊瑚鞭は遺したいため、それを実現するためには全く手に負えないことは諦めて、実現できる書き方をしなければならない。自分の理想を完璧には描くことができないとしても、その作品を、誇りをもって自慢したいという気持ちを表していると考えられる。それが「至重な珊瑚鞭を自慢したい」と、理想的な作品ではないかも知れないが、最善を尽くした自分の作品を自慢したいことを、恋愛物語として表現したかったのである。その恋愛の相手になっているのは貞姫であることは言うまでもなく、大事にしたいのはもちろん、自慢したい気持ちまで持っているのである。

しかしながら、そのような恋愛物語は甘くてロマン溢れるものではなく、叶うことのない悲しくて惨めなものでもある。その気持ちを表現したのが「くず」と「生ごみ」に近似した感興を味わう感覚である。貞姫への叶うことのない、切ない想いは作中での主人公を自分の分身に仕立てて、想いを募らせながらも次第に貞姫への妄想を走らせ、中傷するような感情まで表すようになる。そのような切ない気持ちの表れが「くず」と「生ごみ」の気持ちを味わうことで、珊瑚鞭を自慢したいと語った後に語る順序の理由である。したがってその貞姫に寄せる切ない恋愛こそが、自慢したい珊瑚鞭になり、そのまま作品化されて「終生記」にもなるのである。そのため、それらの恋心を「可憐に」作品の至る所にばら撒くことになるのである。

3-4 作品の評価への願望、そして循環構造

主人公が自ら自分の作品に対して評価を下したり、他人にいい評価をしてほしいと願ったりする様子も「前書き」の文章に表れている。第1段落で語った、謎めいた「卻遺珊瑚」の4文字に関する文章もそのような願望が込められている。なぜなら、貞姫を失いたくない願望を込めている反面、実作においては貞姫を失いかける展開になるが、そのことによって貞姫との恋愛物語が終らず、未完成に終わってしまう。貞姫との関係を描いた恋愛作品を遺書として残したいことは先ほど述べたとおりであるが、この遺書を完成できず、未完成のまま残してしまったことは意図的なミスの一つで、未完成の作品は循環構造を持った作品として仕上げることになる。それを「学者たちの肝胆をヒヤッとさせることをしみじみと願う一念の下」と、自分の作品を評価してもらいたい強い望みを持って作品を披瀝して見せると語られるのである。

このような期待はこれから述べる「前書き」の続きの文章からも読み取ることができる。しかし、それらの文章に表れたのは作品評価に対する自信や期待だけではなく、不安の気持ちも含まれている。貞姫を失いたくないにもかかわらず、失いそうな展開になること、さらにそれを防ぐための循環構造という主人公の読者への挑戦は、自分の作品を評価してもらえるか不安を抱くに十分なことでもある。

無くしたくない貞姫を素材に作品を書き上げたまではいいが、それを評価してもらえるかは不安を抱くに十分なことである。珊瑚鞭を死ぬことがあっても手放さず、握っていたいことを作品化して、それを天下の学者たちをヒヤッとさせるための会心作に仕上げた自

信と、彼らにいい評価をしてもらえるかという不安を同時に抱いている様子が同時に見られるが、作品を書いている以上、評価してもらいたいのが作者の本音である。いい評価をもらうために主人公は悩み、さまざまな工夫をしたわけで、過去を回想しながら作品を書く構成にしたり、貞姫を永遠に失いたくないという一念を循環構造に作ったりしたのである。

多少不安を抱きつつも作り上げた作品である遺書が終わりのない循環構造であることは主人公の自分の作品を評価してもらいたい望みの根源になっている。その望みの一角にはある程度の自信を抱いていることが考えられるが、このような自信を見つけることができるのが第2段落の「一発の砲声で～再犯するはずがないのだ」までの文章である。この文章では遺書を遺したことも遺さなかったことも批判しながら、自分はどちらでもないことを語っているが、これが循環構造にしたい考えを表したもので、主人公の自信を表す文章でもある。遺書に関する代表的な例を二つ挙げて、遺書を残さなかったことと遺書を残したことの両方を批判している。二人の人物とは東郷平八郎とトルストイである。東郷平八郎は「稀代の軍人某」と喩えられて具体的な名前が挙げられてはいないが、「軍人」「英雄」「90歳」といった単語から十分特定できる人物である。この東郷平八郎が臨終の瞬間まで遺書や遺言を一切残さず、人生を終えたことをまず指摘している。そして反対に遺書を遺したことを批判の対象にしているのが、明確に名前までも提示したトルストイである。トルストイは死への旅までは良かったものの、最後の瞬間に遺言を残してしまったため、それまで築き上げたすばらしい人生を無駄にってしまったと語っている。これは東郷平八郎の何も遺さないまま生を終えたことと反対のことで、下手に遺言や遺書を遺してもいけないこととして主人公は捉えているのである。そして「私は一個の狡猾なオブザーバーの資格でそんな愚昧な聖人たちの生涯を傍聴しているため、私がそんな類のミスを知っているながらも再犯するはずがないのだ」と二人を聖人に喩えているが、ただし、「愚昧な聖人」と、二人の遺書を残した行為も残さなかった行為も愚かな行為として否定的に捉えながら、自分は同様のミスを犯さないと述べている。

そのような自分を「狡猾なオブザーバー」と呼び、彼らから一步引いて客観的に観察することによって、両者の前例を踏まないことができると考えているのであるが、では「狡猾」にも自分はどんな方法を使っているというのだろうか。その方法とは論理的には遺書を残すのでも残さないでもない手法ということになるが、それは現実には不可能な手法である。ただ唯一考えられることは、遺書を書き終えることなく、未完成のままに残しておくことである。主人公は「こうして私の終生は終わったが、私の終生記は終わらない¹⁶⁾」と、貞姫の浮気が原因で自分は死んだが、自分の遺書である作品は終らないと語っているが、これは貞姫が浮気をし続けている限り、自分はずっと「終生記」を書き続けることを意味している。主人公は遺書を書いているが、まだ残していない状態を作っているのである。それを完結させて残す時点は貞姫が浮気をやめる時点であり、そのことによって初めて自分は安らかに眠れる状態になるのである。さらに貞姫が浮気をやめるまで主人公は死ねず、生きるしかなく、貞姫の浮気がいつ終るか分からない限り、主人公は永遠に死ねない可能性まであるのである。主人公はこのような手法を使って「狡猾」にも遺書を残すでも残さ

¹⁶⁾ 396頁

ないでもない遺書を書き続けている。そのため、遺書は存在しているが、まだ残していないことになる。第2段落は「終生記」という作品を書き上げたことへの自信と不安、そしてその自信を支えるかのような、作品に組み込んだ循環構造の手法はこのような発想によって誕生したことを語った文章である。

3-5 創作の苦悩と試練

しかしながら、上記のような期待とは反対に作品を書くに当たってどれほど苦悩しながら書いたのかをよく表しているのが第3段落の「鏡に向かって髭を剃る」～「至当な典故を理解できないせいだろう」までの文章である。この文章は執筆に苦悩している主人公の内面心境を最もよく表したところでもある。その心境とは試練や苦悩に満ちたもので、第2段落で見せた、ある程度の意欲や前向きの姿勢から一転して煩惱的な心境を吐露している。貞姫との出来事を作品化するに当たって、どれほど主人公が悩んでいるかをよく読み取ることができる文章である。しかしながら、そのような苦悩を、主人公は自分の観点で表現しているため、非常に抽象的で、難解な文章になっており、意味を理解することは非常に困難である。

まず考えられる文章の意味は、統制できない、分裂している自分に関する心境の吐露である。それは不可抗力のようなもので、コントロールできない自分である。「やっさもっさ大騒ぎする複数」の自分と語っているのは、作品を書きたい情熱に燃えながらも、それとは裏腹に創作に悩む心境を描いているのである。そのため、鏡に向かって髭剃りをする自分の腕がうまくコントロールできず、顔を切ってしまうていらだっているが、鏡の中で複数に分裂している自分の中の一人がミスをしたと責任を取ってもらおうとしても、皆責任を回避してしまうという本来の自分の意志とは関係のない行動に突っ走ってしまう。しかしながら、自分自身でコントロールできず、分裂を抱えながらも、それを断ち切って作品を書こうとする意志も垣間見ることができるのである。なぜなら、コントロールできない自分を何とか克服しながら立て直そうとする意志は、自我とそれに反する自我が対立している状況から読み取ることができる。

なぜコントロールできない反自我と戦わなければならないのだろうか。それは先述した第1段落で、ミスをするしかなかった状況と関係してくる。その状況とは貞姫との出来事を作品化するという状況で、本来書きたかった貞姫との順調な関係を書けない状況である。誤字を犯したいわけではないが、犯さざるを得ないという、失いたくない貞姫を失ってしまった状況は主人公の精神状態を不安定にさせてもおかしくなく、さらに失ってしまったことを作品として記録していかなければならない状況の中で、過去のことを振り返ることは貞姫を失うことに至るまでミスを繰り返してきた自分が存在するのである。このような自分を統括することは正面から衝突しながら制していかなければならず、困難なことである。

第3段落で、猿が人間のまねをしているのではなく、人間が猿の真似をしていると語っている関係は、コントロールできない自分の登場や、本来意図していた、書きたかった貞姫との関係ではない、予期せぬ作品になってしまった、本末転倒のような状態になったことを語った文章である。したがってこのような関係は、「前書き」の第1段落の引用で述べたような誤字を犯してしまったことにも通じるもので、そのことによる、分裂したかの

ように複数の自我が表れてしまうという手法を表す傍ら、それだけ作品を書くのに苦悩を伴ったことを表した文章になるのである。

以上のように、第3段落は、コントロールの効かない自分が複数の話者になって執筆している作品にひょっこりと顔を出そうとしていることを抑えて作品を書くことの難しさについて述べているが、より困難な様子を示したのが「前書き」の第4段落の「嗚呼～その両目を触ったり」の文章である。「アダムとイブのそのような衝動的な習慣」に喩えられている最も原始的で基礎的な人間の生活、それは禁断の林檎を食べることによって得られた知的な好奇心の獲得や生きるための労働といった人間生活の必要不可欠なものである。そのような人間の営みから脱却していることは、生きることをあきらめているか、生活も忘れて何かに没頭しているかのどちらかであろう。遺書を書いており、貞姫との出来事を基本にして自分の人生を振り返って考えているとはいえども、この段階まで生きて死を覚悟したとは考えられない。死を覚悟したのは春の物語を書き始めた時点で、書く途中ではない。そのため、何かに没頭していると解釈できる。何かに没頭している姿とは、「本編」の冒頭にも描かれているように自分が作品を書いている状況であり、その状況から考えて何かに没頭している姿は原稿用紙に向かって作品執筆に没頭しているとしか考えられない。

白紙に向かってひたすら書き込んでいくことは、気の遠くなるほど同じことを繰り返すため、「反射運動」のようなものになる。作品を書いていくに連れて自分が意図した展開ではなく、反射的に書いてしまうという執筆の苦悩を表している。作品執筆に没頭しすぎたため、反射運動のように無意識に白紙の上にペンを走らせることになり、本来自分が意図した作品ではないものができ上がっていくことを意味する。これこそが作者の主人公を最も悩ませる苦しみの原因である。無意識の虜になっている状況の中でも時々自意識を取り戻す瞬間が訪れる。短い瞬間でありながら、ふと自意識を取り戻した時は、作品を書く手が意識のコントロール下に置かれる瞬間になるのである。作品を書いていた手は鼻を触ったりして自分の存在を確認するのである。また作品執筆の最中で、それが自意識を妨害して自意識を破壊しようとする瞬間でも、ハンカチで目やにをとったりするという、自分を取り戻す行動を見せているのである。このような一連の苦悩と格闘の末、作品は書かれるようになるが、本来書きたかった作品ではなく、ミスを犯したような違う方向での作品に仕上げていくようになる。その本音がうまく表れたのが第5段落の「私の魂魄と～ばら撒いてみようとしているのだが」までの文章であるが、前章で述べた通りである。

3-6 逆境の乗り越え—作品の完成時点

最後の段落は「幸に拍手する。以上」と短い文章である。しかしながらその短さの裏には様々な意味が隠されている。まず、拍手される対象を考えなければならない。それは当然自分のことである。今まで述べてきたような執筆に関する問題を乗り越えたこと、あるいは乗り越えて創作できる自信を持ったことを意味する。そのため、自分に向けて拍手喝采を送っていると考えられるが、さらに「幸い」と付け加えているため、作品を失敗せずに、意図した通り、何とか無事に終えたという安堵の気持ちが込められている。

このように考えると、この文章は前の段落の文章と比べて時間的なずれが生じているとも言える。そのため「前書き」の全文は「終生記」執筆の全期間に渡って少しずつ書かれたことも考えられ、いい作品を書く決心から執筆途中の苦悩、執筆を終えての安堵の気持

ちまでも表すようになっているのである。「前書き」がいくつかの段落に分かれていることやその段落間の内容のギャップは、各段落が違う時期に書き上げられたことを裏付けており、主人公の長期間に渡っての執筆活動の諸断面を見せている。このことにより、「前書き」を書いている時点は「本編」の秋の時点の作品を書いていると語っている時点より後の時点であることが分かり、すべてを終えた時点でそれまでの経過を振り返りながらまとめて整理している形をとっている。したがって、この文章が作品の最後に位置する文章として結末に当たるといえる。

ともあれ、第6段落の文章は作品執筆を終えた後、あるいは苦難を乗り越えて終らせる自信を持った時の態度として、傑作作りの成功を確信している内面の声が直に表れた文章である。芸術への情熱を持って遺書や女性への想いを書いていけばきっと芸術性の高い傑作になると確信した拍手であり、自信に満ちた拍手になるのである。

結論

「前書き」は1ページ余りの文章であるが、「本編」の前に位置しながら、「本編」に関して様々な角度で情報を与える文章である。それは話者、構造、時勢、作品構成、主題にまで至るもので、これを分析することによって「本編」のほとんどの内容が分かるほどのものであった。

複雑な「終生記」の構造は複雑な話者によって生み出されているもので、「前書き」、秋、春という構造に従って、それぞれ異なる主人公が設定され、一人称視点として展開されるため、それぞれの話者が要求される。しかし、「前書き」の話者は秋の主人公の延長線上に位置している同一人物で、春の物語の話者である主人公は秋の主人公によって書かれる作品の中で、秋の主人公自身の気持ちを代弁する分身のような存在である。

また、「前書き」を書いている主人公の視点は最も現時点に近いもので、春の時点での貞姫との事件が終わった後、それをまとめて作品を書こうとしている秋の自分を経て、作品が終わった後に、全てを振り返りながら作品化に至った事情を語っている。しかしながら、「前書き」の位置は作品の冒頭に位置しているため、作品の時間的な順序は逆戻りすることになっており、それは貞姫との関係が終らず、したがって自分の作品も終わらないため、永遠に循環するような形をとっている。それは愛してやまない貞姫への愛も永遠に続くことへの祈願でもある。

しかしながら、主人公が回想していた貞姫との関係はうまくいくものではなく、そのことを作品化することは非常に痛切な痛みを伴うものでもあった。自我は分裂するかのような状態が続いたりする作品執筆の難しさも吐露している。

「前書き」はこのように作品執筆に関する自信と評価に関する不安、作品展開の構想などを打ち明けているような文章であり、悲壮の覚悟で遺書のように描くしかなかった切なさが込められている文章でもある。したがって「前書き」はこれから書いていく作品をどう展開させていくのかを語ったものではなく、どう書いてきたのかをまとめた文章であり、作品の時間的な舞台の最後に位置しながら、書きたかった方向に書けなかった事実を痛感する傍ら、作品執筆に望んだ自分の気持ちを表した文章なのである。